

西欧諸国の世界侵略の心理的背景について

塹江清志・早川清一

本論文においては、コロンブスに始まる大航海時代以降の西欧人の世界侵略・植民地化の背景についての考察がなされた。西欧の風土において歴史的に培われてきた西欧人の民族的・精神構造としての「断絶感」に由来する心理特性と、西欧近代化時代の挫折状況とがその背景であると述べられた。

キーワード：西欧人の精神構造、断絶感、民族的・精神構造

1. 本論文の目的

1853年のペリー来航によって日本は開国を強要され、以後2003年の今日までの151年間、国際社会の中で国家経営を営んできたが、2003年の今日の世界情勢とそのメカニズムを検討するとき、日本の行方として、日本消滅は必至と思える。所詮、国といえども国民の集合体であり、国の存続を賭けての経営行動は、究極的には国民の精神構造・心理特性に依拠するものである。従って、日本消滅の根本的原因は日本人の精神構造・心理特性にあると言わざるを得ない。日本人の如何なる精神構造・心理特性が日本の消滅の根源因になったかを考察することが、著者達の究極の目的である。この目的に沿って、ペリー来航の1853年から2003年の今日に至る151年間の日本国経営の歴史において、その重大局面での挫折行動の根源因が日本人の心理特性にあることを今後の一連の論文において考察したい。

上述のことを踏まえて、本論文の目的は、その第1歩として、西欧諸国が、大航海時代以来世界を侵略し、世界を植民地化した歴史的背景、及び、その歴史において示された彼等の行動をその根底において動機付けた民族的・精神構造としての「断絶感」に由来する心理特性について考察することである。

これは、西欧諸国に続いて、建国後の米合衆国もこの作業に参入し、その一環として1853年にペリーが来航したからである。ペリー来航への対応から日本国の国際社会の中での国家経営行動が開始されたからである。

2. 西欧人の民族的・精神構造としての「断絶感」

2. 1 西欧人の民族的・精神構造としての「断絶感」

2. 1. 1 民族的・精神構造とは

民族的・精神構造とは木村¹⁾の言葉であるが、彼によれば「各民族に固有の精神構造（心理特性）」のことである。それは、ユングの民族的無意識に相当する言葉である（塹江²⁾）。

2. 1. 2 民族的精神構造の因としての風土

木村¹⁾は、風土論的精神構造論において、民族的精神構造を当該民族の生活環境としての自然環境によって生成された固有の風土によって歴史的に育まれたものとして捉えている。木村¹⁾・和辻²⁾の風土論に立脚して、塹江³⁾は、個体発生における個人の意識の発生・発達にアナロジーを求め、過去数千年に渡る西欧の風土と日本の風土との比較から西欧民族の民族的精神構造を「断絶感」、日本民族のそれを「一体感」として同定している。

2. 2 西欧近代化時代の意義

2. 2. 1 西欧人の歴史的課題

人間の生を根元的に規定するものは水（食料の象徴）と安全（外敵）であるが、それを根底において規定するのは、少なくとも人類の歴史の初期においては自然環境である。自然環境は、まず、気温と降水量において「水」を介して根元的に人間の生を規制する。歴史的にみて辺境不毛の僻地であった西欧の自然環境は、人間の生を極度に阻むものであった。

従って、飢えと寒さに歴史的に苛まれて生を営んできた西欧人にとっての歴史的課題は、飢えと寒さからの解放であった。換言すれば、彼らの歴史的課題は、生産性の向上であった。気温と降水量の条件に加えて、氷河期の地質による極度に痩せた土地での生産性の低さと有史以来5度の氷河期における寒冷化による食料生産性の低さは、西欧に生きる人間の生の極度の惨めさにさらに追い打ちをかけるものであった。

従って、西欧人の民族的精神構造としての「断絶感」に由来する、いわゆるハングリー精神に裏付けられた闘争心・勝利への飽くことなき執着心と猛獣のような獰猛な精神としての皆殺しの精神・骨の髄までしゃぶり尽くすような徹底性を西欧人は歴史的に育んできたと思像することは容易である。後述するように、大航海時代以来西欧人が世界侵略によって、世界植民地化作戦を遂行し、その後、世界経営作戦を今日まで遂行してきた歴史の中に、この精神・心理特性を発揮してきたことを容易にみるのできるのである。

2. 2. 2 西欧近代化時代

木村⁵⁾によれば、西欧近代化時代の人類史的意義を以下のように要約できる。

西欧における1550年から1850年までの時代を西欧近代化時代という。

この時期は、有史以来に生じた5回の氷河期の中の第5氷河期で、それ以前のそれに比して最大のものであった。（従って、西欧世界にとって、社会的次元においても、いわゆる超氷河期であった。）この期間は、1550-1700年の前半期と1700-1850年の後半期に大別される。前半の方がより人間の生を阻害するものであった。

従って、西欧近代化時代は挫折の時期と呼べる。

この時期における西欧人の挫折状況は以下のように要約できる。

- 1) 寒冷化による極度の食料不足からの「飢え」
- 2) 「飢え」による体力低下による近代化の病と称される「ペスト」（悲惨な迄の人口低下。とても今日のSARSの比ではない。）
- 3) 「飢え」・「ペスト」による人心の荒廃、不信感・断絶感、欲求不満による外罰（他罰）反応としての極度の他者への敵意、万人の万人に対する闘い（これを体裁を整えて現代風に表現すれば、タテマエとしての「一人は万人のため、万人は一人のため」）

- 4) これらの心理の社会的表現としての「魔女狩り」(西欧社会における最も無力な存在(「力の原理」に至上の価値を置く西欧社会で、「無力」であることの条件としての女であること・老人であること・一人暮らしであること・貧しいことの全ての条件を備えた存在)としての魔女)での300万人の火刑と宗教戦争を含む「戦争」
- 5) 飢え・ペスト・魔女狩り・戦争が西欧近代化時代の「四重苦」(四苦)である。(仏陀は、「四苦」の発見で悟りの境地を達成したが、西欧人も「四苦」の状況を超克して世界の覇者となった。)
- 6) この挫折を超克することによって、西欧人は有史以来彼らが育んできた精神性及びその所産を結晶化し、その後の人類の歴史において普遍性を獲得した所産を生み出した。その最も根元的な所産は、近代合理主義・自然科学・民主主義・近代社会などである。このことを西欧の普遍化・世界化、脱西欧化という。
- 7) 西欧近代化時代の挫折の結果としての所産によって西欧の世界制覇が達成された。後世の人は、この結果だけから西欧近代化時代を皮相的に解釈し、豊かな近代化時代の結果として、西欧近代の文化の華が開いたといういわゆる西欧「近代の神話」を創作した。事實は、上述したように、西欧近代化時代において、西欧人は歴史上未曾有の物心両面における惨めさを味わったのである。

3. 西欧諸国の世界侵略

3. 1 西欧諸国の世界侵略の背景

3. 1. 1 「飢え」からの脱出手段としての強奪作戦

人間の生に不可欠な食の欠乏状況で、人間が生になお執着するならば、かつての大日本帝国陸軍の杜撰な作戦計画の象徴としての「糧を敵に求める」ではないが、自給不可能なら他者の糧を奪うしか生きる道はない。古来より、遊牧民族の生の方策は略奪と皆殺し方策であった。牧畜は農業に比して生産性が極度に低いものであり、前述のように歴史的に飢えに苦しんできた西欧人の生の確保の方策は、略奪であった。歴史を遙か以前に遡れば地中海世界を支配したローマ帝国の経営政策は、略奪経済であった。元来土地生産性の低い地域での略奪作戦は、被略奪民族は食の欠乏から絶滅せざるを得ず、従って、翌年はさらに遠隔地への略奪作戦を実施せざるを得ず、結果として帝国の版図が広大なになったのである。

前述のように近代化時代の第5氷河期における西欧人の飢えは、歴史的にみてその頂点に達したものである。それ故、生のための食の確保手段として西欧諸国による世界侵略に至ったのである。

3. 1. 2 金・胡椒(香料)・食糧・奴隷

前述のことから西欧人が海外での略奪の対象とした物は、正に食糧であり、そして、胡椒(香料)であり(鱒田⁹⁾、金であった。奴隷は教科書などでは決して触れられていないが、コロンブスにおいてすでに開始されているのである。

3. 1. 3 海賊国家イギリス

「工業国は食事が貧しい」という言葉に表現されるように、西欧諸国の中で飢えに最も苦しんだのは英・独であり、英国が海賊国家となったのは必然である。エリザベス女王(1558年11月

17日即位)時代の英の人口は、350万人であったという。英国とほぼ同面積の日本の1598年のそれは1,800万人であった。

キャプテン・ドレーク(フランシス・ドレーク)は、エリザベス女王公認で、世界周航海賊作戦を実施し、その功績によってエリザベスからナイトの称号を授与されたのである。

3. 1. 4 世界侵略の戦術としての合理主義精神と皆殺し精神

西欧人が世界侵略を遂行し、全世界を彼らの植民地にすることに成功したのは、彼らの使用した近代兵器のせいではない。因みにコロンブスが第1回目の西インド諸島への航海に使用した3隻の船の中で最大の船は旗艦サンタ・マリア号であったが、250トンであった。マゼランが世界周航に使用した5隻の船の中の旗艦トリニダー号は150トンであった。明の永楽帝(1402-1424年)の治世時に宦官提督・てい和は7回に及ぶ大遠征航海を実施したが、彼は8,000トン級の船を一度に60余隻使用したという。要は明の国策が、世界侵略になかっただけのことである。当時の中国は、生のために、他国を侵略し、生活物資を略奪する必要などなかっただけのことである。

西欧人が上述したような生の歴史の中で、歴史的に培ってきた断絶感に基づく合理主義精神(「断絶感」→対象化→観察→法則性の定立→対象を「法」に則って操作・支配・制御する姿勢、即ち、合理主義)と「皆殺し」(「断絶感」→対象絶滅思想→皆殺し)を平然と遂行できる精神が成功の因である。すでに、コロンブスの西インド諸島侵略時より西欧人の精神性は十二分に発揮されている。

臣従の姿勢で朝貢する周辺民族に対して、大げさに表現すれば10倍返して国家財政の破綻を招来した歴代の中国の王朝とは全く異質のものである。

3. 2 西欧諸国の世界侵略の経過

3. 2. 1 大航海時代における航路開拓

コロンブス(Christopher Columbus イタリア系ユダヤ人 1451-1506)の航海によって大航海時代が開始されたとされ、コロンブス、バスコ・ダ・ガマ(Vasco de Gama ポルトガル人 1469-1524)、マゼラン(Fernao de Magalhaes ポルトガル人 1480-1521)らの航路開拓によって西欧諸国による世界侵略が始まった。

布教などは、タテマエにすぎない。宣教師の意図はどうであれ、彼らの果たした役割は結果的には世界侵略・植民地獲得の先兵のそれであったことは歴史的事実である。

3. 2. 2 西欧諸国の世界侵略経過

コロンブスらの航海以後西欧諸国の世界(アフリカ・中東・インド・アジア・オセアニア・北米大陸・南米大陸・太平洋諸島)侵略が本格的に遂行されたが、初期は専ら、ポルトガル・スペインによってなされ、オランダ・仏・英が続行し、西欧諸国の中では最後に独が侵略作戦に参加した。更には、西欧諸国に遅れて米も参加した。そして、後期には欧米列強間での植民地争奪戦も実施されたのである。

西欧諸国の世界侵略において発揮された残虐性は、スペイン人の侵略において典型的にみられる。コロンブスに始まる西インド諸島侵略においては、エスパニョーラ島で、金・食料の略奪→原住民の反抗→原住民を虐殺(火刑・つるし首・犬にかみ殺させるなどで、300万人の島民が50

年後に200人になったという⁷⁾。又、原住民を農園・鉱山での奴隷労働などで酷使したのである。更に、メキシコ侵略においては、アステカ王国を滅亡させ、その極めつけが、ペルー侵略におけるインカ帝国の滅亡である。

フランシスコ・ピサロ以下180名の第3次インカ帝国遠征隊は、エクアドル沿岸を略奪（金・エメラルド）しつつペルーに侵攻、12代皇帝ワスカールの弟のアタウアルパ王子を人質にして「部屋一杯の金とその2倍の銀」と交換し、アタウアルパに命令させて皇帝殺害、その後、アタウアルパも殺害し、1533.11.15に首都クスコに到着し、首都を征服した。首都での略奪に当たっては、民家・宮殿・神殿・墓を破壊し、金銀を略奪した。南米・中南米を侵略し銀の採掘権を独占し、先住民インディオ・アフリカの黒人奴隷を酷使し、鉱山開発を行い、植民地からの収奪で西欧諸国の中で最初に繁栄を謳歌し、「太陽の沈むところのない大帝国」と称されるようになった。

4 産業革命による世界植民地化戦略の永続

4. 1 産業革命の成立

4. 1. 1 産業革命成立の因としての蒸気機関の発明

(1) ジェムズ・ワットによる効率的蒸気機関の発明

ジェムズ・ワットによって1769年に蒸気の利用した本物の蒸気機関が完成された。1782年には、回転運動（複動）蒸気機関に改良し、最高の蒸気機関の完成と言われた。ワットは功績により1786年にナイトの爵位を授与された。

(2) 産業革命の成立因としてのワットの蒸気機関

ワットの蒸気機関は、製造業では、最初に木綿工業（紡績機械・織物機械）で使用され、時と共に木綿工業以外の分野に利用されるようになり、1783年には製粉工場に利用されるようになった。

ワットの蒸気機関は、その後全産業において生産機械の動力として利用されるようになって、機械生産による大量生産が初めて可能になり、ここに英において世界に先駆けて産業革命が成立したのである。

人類の歴史的課題が「飢え」からの解放であるならば、生産性の向上こそ人類史的課題と言える。この意味で、蒸気機関の発明は、人類の歴史における幾多の発明の中で最も高く評価されるべき発明と言える。

4. 1. 2 産業革命拡大のメカニズム

産業革命とは生産機械による大量生産と輸送機械による大量輸送であるとすれば、産業革命拡大のメカニズムとは石炭・鉄鋼・蒸気機関車の3つの要因の仕組みである。これは、産業革命が無限大に拡大するメカニズムと言える。石炭を蒸気機関車で大量に輸送し、鉄鋼を大量に生産し、生産された鉄鋼で鉄道を敷設し、蒸気機関車を製造し、一方で生産機械を製造することによって、機械生産による大量生産と輸送機械による大量輸送が達成されるからである。

しかし、この産業革命拡大のメカニズムは、炭坑の石炭採掘現場での蒸気機関利用の排水ポンプによる石炭の大量採掘と蒸気機関車による石炭の大量輸送による大量の鉄鋼生産によって始めて成立することは言うまでもない。

4. 2 産業革命の拡大と発展

4. 2. 1 産業革命の拡大

繊維工業（木綿工業）の発展において開始された産業革命は、産業革命成立のメカニズムが他の業種に及ぶとき、即ち、その業種の生産機械の製造に及ぶとき、その業種での大量生産・大量輸送が成立し、産業革命が成立するのである。結果として、産業革命は全業種に及んだのである。やがて、生産様式も注文生産から見込み生産に変化した。

4. 2. 2 産業革命の発展

産業革命の第1段階は、生産革命であり、製造業における蒸気機関を動力とする生産機械による大量生産の発展であった。

第2段階は、交通革命であり、輸送業における蒸気機関を動力とする輸送機械（蒸気機関車・蒸気船）による大量輸送であった。1807年に米のフルトンは、外輪式蒸気船・クラームント号を発明した。ニューヨーク・オルバニュー間航行により汽船の時代が始まった。初期は風と併用し、19世紀末でも貨物船は帆船の方が多かった。

4. 3 産業革命による世界植民地化作戦の永続

4. 3. 1 インド・ビルマの木綿産業破壊作戦

産業革命によって工業製品の大量生産が可能になり、これを販売することによって自己の利潤を追求しようとするとき、その阻害要因は同業他者・他企業である。他者・他企業を破壊すれば、市場を独占することが可能になり価格支配は思いのままになり、無限の利潤を獲得出来る。

英国における木綿工業は、インドのキャラコ産業によって開始されたのである。インドのキャラコに初めて接した英人はその製品の質の虜となり、毛織物を嫌悪するようになつた。英でもキャラコを模倣してみたが、製品の質においてとても太刀打ち出来なかつた。そこで、最初にインド産に高い関税を課したが効き目はなく、次に、輸入禁止した、そして、最後には、インドのキャラコ職人の両手切断迄行ったこともあったという。やがて、英製品の品質の向上もあって、インド製品に依存する必要もなくなり、また、インドの木綿産業も崩壊させられたので、インドは木綿製品の大量輸入国にまでなつたという。

ビルマ（ミャンマー）の場合も似たようなものであつたという。機械生産による大量生産品は、手工芸品のような質は望むべくもないが、品質の均一性と低価格とでもって、高価格・高品質の製品を社会全体からみると駆逐する。ビルマの綿産業はこのことで衰退したという。

4. 3. 2 産業革命による世界植民地化作戦の永続

大量生産・大量販売によって利潤追求を目指すとき、それを達成するには上述のように、競合者を破壊することと、原料・市場の確保が不可欠である。飢えからの脱出を企図して西欧諸国は大航海時代以来前述のように世界侵略を開始し、世界を植民地化することによって生活物資を強奪し、飢えをしのいだわけである。

彼らが獲得した植民地は、全工業製品の原料を無尽蔵に所有し、かつ、人口の多さは（インド・中国など）工業製品のまたとない良き市場なのである。従つて、産業革命によって産業社会が成立し、変質した資本主義精神の下で、産業経営が営まれるに至つて、西欧諸国は彼らがそれまでに獲得した植民地は従来以上に彼らの豊かな生にとって不可欠なものとなつたのである。そ

れ故、彼らの世界侵略・世界植民地化作戦は、19C後半以降も止むことなく続行されたのである（アルジェリア・仏印、南ア、中国、そして、日本を目指してペリーの来航）。

世界の植民地化が終了したとき、今度は再分割を目指して、列強間での植民地争奪戦が遂行されたのである（米西戦争、第1・2次大戦）。

第2次大戦後は、時代状況に鑑みて武力による植民地化作戦は放棄され、純粋に経済的侵略による経済植民地化作戦に転換されたのである。経済植民地化作戦遂行の「手段」が、1944年7月（6月に欧州戦線ではノルマンディ上陸参戦の遂行・太平洋戦線ではサイパン陥落寸前で、計画に狂いなく第2次大戦の帰趨が決定した。）のニューハンプシャーでのプレトンウッズ会議で構築されたのである。その手段とは、GATT（→WTO）・世銀・IMFであった。中国がWTOに加盟し、イラク戦も終了した現在大航海時代以来実施されてきた世界植民地化作戦もいよいよ大詰めを向かえている。

参考文献

1. 木村 敏 『人と人との間』 弘文堂 1972年
2. 塹江 清志他 「「一体感」と「断絶感」」『名古屋工業大学紀要』Vol50, pp. 185-190 1998年
3. 和辻 哲朗 『風土』 岩波書店 1963年
4. 塹江 清志他 「精神構造の規定因としての「自然」」『名古屋工業大学紀要』 Vol.51, pp. 187-191 1999年
5. 木村 尚三郎 『近代の神話』 中央公論社 1975年
6. 鯖田 豊之 『肉食の思想』 中央公論社 1966年
7. 桐生 操 他 『女王の国イギリス・ベルサイユの太陽王』（物語世界史7）学習研究社 1983年

The Reasons for the West Nations' Invasions upon the World
Kiyoshi Horie and Seiichi Hayakawa

The purpose of this paper is to discuss the reasons for the West Nations' Invasions upon the World. It is concluded that the reasons are the European psychological traits derived from the feelings of the "disruption" as European national mental structure which have been historically cultivated in the climate in the West and the situations of the disruption in the West modern age.

Key words: West nations' invasion, European psychological traits, feelings of the "disruption", European national mental structure, the disruption in the West modern age